



香りを測る，感覚をつなぐ

琉球大学理学部の佐伯健太郎先生よりバトンを引き継ぎました，熊本県立大学の白土です。

バトンといえば，昨日（執筆時点）は娘が通う中学校の体育大会がありました。メイン競技であるリレーでは，各学年4クラスがそれぞれ四つの団に分かれて競い合うのですが，娘の所属する団は，スタート時点からあまり好成績を残せない組が多く，珍しく途中まで良い順位でバトンをつないでいたとしても，バトンを落とししまい，結果的に最下位になってしまう場面もありました。

……話がそれましたね。

今回バトンをくださった佐伯先生とは，これまで面識がなかったのですが，懇意にしている熊本大学大学院先端科学研究部・戸田敬先生の研究室ご出身というご縁で，今年2月に京都で開催された研究会に出席した際にご紹介いただきました。その交流会の席で，リレーエッセイの次回執筆者についてご相談を受け，美味しいお酒も手伝ってすっかり気分が良くなっていたこともあり，深く考えずにお引き受けしてしまいました。しかし，いざ何を書くかと悩んでいるうちに締切が目前となり，「ここでバトンを落とすわけにはいかない」と，ようやく筆（キーボード）を取った次第です。

私は学部4年次から博士後期課程修了まで，九州大学農学部（当時）の箴島豊先生のもとで，畜産製品の品質因子としてのフレーバーについて研究してきました。学位取得後，熊本県立大学に職を得た際，箴島先生からこう言われました。「どんな研究をしてもよいが，フレーバーの研究は続けなさい。」この言葉が，私の教員生活の道標となりました。そのおかげで，多くの共同研究や委託研究のお話をいただく機会に恵まれ，研究の幅を広げることができました。

ご存じのとおり，私たちは食品の「おいしさ」を，香りや味，食感など五感を通して感じ取っています。これは極めて主観的で質的な評価です。だからこそ，GC-MSなどの機器分析によって得られる客観的なデータと，それをいかに結びつけるかが重要な鍵となります。客観性が重視される分析化学において，人の感覚という曖昧で主観的な対象と向き合うことは，常に頭を悩ませる課題のひとつです。それでも，分析化学の力を用いて感覚の世界を解き明かしていくことに，大きな面白みを感じています。

一方で，私の趣味は，写真，サーキット走行（四輪），ロードバイク，オーディオ，パレエ鑑賞，山歩きなど多

岐にわたります。これらは「感覚（センサー）を鍛える一助になっている」と，半ば強引に解釈しています。

中でも，ロードバイクを例に挙げてみましょう。休日にじっくり乗る時間は限られているため，主に通勤に活用しており，昨年の年間走行距離は2200 kmを超えました。比較的速いペースで走っていることもあり，体脂肪率は一桁目前で，メタボとは無縁です。加えて，大腿や下腿の筋力も向上し，フレイル予防にもつながっています。さらに，消費するエネルギーを自ら賄うという点でエコな移動手段ともいえ，環境共生学部・食健康環境学専攻に所属する私にとっては，まさに理想的な通勤スタイルといえるでしょう。

……とはいえ，荷物や人は運べませんし，車体やパーツにはそれなりの費用もかかるため，財布にはあまり——いえ，まったく優しくありません（笑）。それでも，季節の移ろいをいち早く感じられますし，風向きや風速の変化がダイレクトに走行負荷として現れるため，普段は気づかない自然の微細な変化を感じ取ることができます。ロードバイクに乗ることは，日常から少し離れて新たな感覚を得る，まさに“感覚を磨く”手段のひとつといえるでしょう。



図1 感覚を磨いてくれる愛機たち

まとまりのない，やや雑ばくなエッセイとなってしまいましたが，日常生活の中でも感覚を鍛えつつ，人の感覚と向き合う分析化学の発展に，微力ながら貢献できればと考えています。

さて，今回の執筆者は，箴島一門（笑）の後輩である中村学園大学の沖智之先生にお願いしました。ご多忙の中，快くお引き受けいただき，心より感謝申し上げます。

〔熊本県立大学 白土 英樹〕